

中野渡先生の思い出

池 田 一 新（政治経済学部長）

中野渡先生を知ったのは恩師赤倉武先生を介してであった。中野渡先生が本学に来られる直前に赤倉先生から「私の友人で、四晩、五晩と語り明かしても話のつきない人がある。その人が今度うちの大学へ来られることになった」と承ったのが最初である。

明治大学へ赴任されてからは、教務主任、スキー部長、さらに初代学生相談員長などを歴任されたが、なかでも長年におわたって、それこそ心魂をそそいで貢献されたのは学生相談室の専門員としての御活躍であろう。先生の専門が社会心理学、産業心理学であったこともあって、相談室と中野渡先生とは切り離せないものと考えられていた。そういう因縁から学生相談員長制が施かれると同時に、初代の長をつとめられることになったわけである。

先生の「面倒見」の良さは定評のあるところであり、学生だけでなく、教職員のなかにもいろいろな面で先生の御親切を受けた人がかなり多いと思われる。しかも「信行」の名の示すごとく、人と交じわりて「信」の一字につきる御交際であったと思う。とくに私は、赤倉先生との御縁もあって、きわめて多岐にわたる面倒を見て貰ったのであり、先輩教授というよりも、兄貴分のような気持でおつきあい頂いていた。私事で恐縮ではあるが、生来、胃腸が弱いという話をする、「酵素を飲みなさい」といって京都の薬屋からわざわざ取り寄せた薬を持参して頂き、腰痛に悩まされたときには、黒い膏薬を壺入りで買って来て頂いたのには恐縮してしまった。一番身に沁みて感謝しているのは、昭和三十年代に痔病で苦しんでいたさいに、週刊誌に掲載されていたという記事の切り抜きをもってこれ、新橋肛門科なる病院を紹介して貰い、注射療法をうけて完治したことである。爾来、好物のわさびや酒を好きなだけ口にすることができるようになり、明るい人生（この気持は痔病を経験した人でないと思われるが…）を送れるようになったのは、一重にも二重にも中野渡

先生のお陰である。

先生は御自分では表面にたたず、常に陰でひき立て役を買って出るといったことを意識的にしておられたように思う。それでいて決して自分が教えてやったとか、助けてやったといったようなことを仰言ることも、素振りで示されることさえもなく、それがまた中野渡先生の心根の優しさを泌々感じさせることにもなり、お人柄を慕わせることにもつながっていたと思う。

先生の講義の名調子のゆえに、常に受講生が大教室に満ちあふれんばかりであったことは有名であるが、そのため、採点には御苦労されていたようで、期末になると「採点表の提出が遅くなって困る」と、忙し気にぼやいておられたことが思い出される。ところが、昭和五十六年度の採点は、入試以前に既に提出されていたということであり、無意識裡に死を予期されていたことであつたのかと思いたくなるような事実である。同じことが、学生相談員長の件についてもいえる。学生相談員の交替にあたつて、和泉地区選出の松山先生が交替されるかどうかについて、私のところへ来られて、「昭和五十七年度は松山先生に相談員長をお願いしたいから、相談員は松山先生に留任して貰うようにして欲しい」といわれていたことも、死後の整理をされていたのではないかと思いたくなるような言動であつた。

「虎は死して皮を残す」というが、先生の通夜、葬儀などを通じて、わが政経学部の教員だけでなく、御夫人方も一堂に会して親交をむすぶ機縁をつくって頂くことになった。これまでになかったことであり、まさしく中野渡先生は死して、家族ぐるみのおつきあい大切さを教えられたのではないかと考えられる。

先生の思い出はつきないが、最後に、とくに先生が学生の立場から常に物事を考えるという教育者の姿勢を貫かれていたことについて一言しておきたい。「教師は学生の水準を云々するまえに、自分の教え方についての反省をすることが必要なのではないだろうか」といわれたことが今でも鮮明に思い出される。この態度は先生の採点評価にも示されていたと聞き及んでいる。われわれは、この先生の心を心として、政経学部の教育水準の向上に努力することをお誓いして、追悼の辞に代えたい。